欧米との比較した場合の日本の家庭内における読み聞かせの特徴

The characteristics of storytelling in Japanese house-holds compared to those in Western countries

高　　雪　飛 *

Xuefei GAO

Ⅰ　研究背景・目的

絵本読み聞かせは文化、言語、国を超え、どの家庭でもよく行われている活動の一つである。絵本読み聞かせの効果として、これまで「聞くこと・話すこと・読むことの複合的な発達」、「絵本の中の表象を育つ」、「情緒安定」、「豊かな感情を育む」などを取り上げてきた（「絵本事典」、2011）。絵本における研究は、教育学、医学、心理学、脳の科学などの幅広い分野でされてきた。

保育士を対象にした読み聞かせの目的に関する研究では、保育士は読み聞かせに対して複数の目的を持っていることが明らかにされ、絵本選びについて０、１歳児では、リズムや響きを楽しむ絵本を読み聞かせし、4、5歳になると、ストーリー性のある絵本を読み聞かせされていることが先行研究で明らかにされている（笹田・山本、2021）。また母親を対象にした読書環境の調査では読み聞かせの目的について、年少組は年中、年長組よりも「本を通して親子の触れ合い」重視し、読み聞かせの意義を「空想したり、親子の触れ合い」と「文字を覚え、文章を読む力や生活に必要な知識を身につける」と２つの意義を取り出し、多くの母親は「空想したり、親子の触れ合い」という意義を重視することが明らかになった（秋田・無藤、1996）。

絵本読み聞かせは「聞くこと・話すこと・読むことの複合的な発達」、「絵本の中の表象を育つ」、「情緒安定」、「豊かな感情を育む」などの効果がある（「絵本事典」，2011）。5、６歳児を対象にした集団での読み聞かせ効果に関する研究では毎日同一絵本を繰り返しすることで語彙獲得を促進する可能性が示した（雨越ら、2020）。幼稚園教育指導要領の言葉の内容には「絵本や物語などに親しみ、興味をもって聞き、想像をする楽しさを味わう」と記載し、幼稚園教育指導要領の言葉の解説には「幼児は、絵本や物語などでみたり、聞いたりした内容を自分の経験と結びつけながら、想像したり、表現したりすることを楽しむ。以下略」（幼稚園教育要領解説平成30年２月）、保育園保育指針の言葉の内容のねらいには「絵本や物語に親しむと共に、言葉のやり取りを通じて身近な人と気持ちを通わせる。」、解説には「絵本や紙芝居を楽しみ、簡単な言葉を繰り返したり、模倣をしたりして遊ぶ」と記載されていた（保育園保育指針解説平成30

* こう　せつひ　人間科学研究科人間科学専攻博士後期課程
指導教員：中村　奈良江

年２月)。上記の内容を踏まえ、保育所や幼稚園における絵本の読み聞かせは、専門知識を持つ保育士・幼稚園教諭が行われるため、一定のスタイルが形成されていると考えられる。一方、家庭内における読み聞かせの意義は必ずしも同じではない（秋田・無藤、1996)。

日本の子どものための絵本の歴史は古く、明治時代から始まった「絵雑誌」と単行の「絵本」という二つの大きな流れがあった。絵本の広がりは明治末期に、「画帖」や「絵ばなし」と称され、「絵本」という意識がある本が出版されることになった（「日本の絵本の歩み」、平成29年11月)。現代の絵本として「ぐりとぐら」、「お風呂大好き」、「こんとあき」などのロングーセラーを始め読み聞かせの素材としての絵本は年々たくさんの新しい絵本が出版され、日本の絵本は国内だけではなく世界中で人気を呼んでいる。

また、絵本の読み聞かせは日本だけではなく、世界中のほとんどの家庭で行われているものである。中でもヨーロッパを代表としたイギリスがブークスタートの発祥の国でもある。アメリカは主にこれらの国からの移民の国であり、小さい子どもから多様性を受け入れることを育成し、絵本にもこのような観念がたくさん反映された。これらの歴史発展や文化からは国々に共通するものがある一方で、育児態度や読み聞かせ行動において異なる点もある。これまでは日本における絵本の読み聞かせについての研究は小学校、幼稚園などの教育機関で行われてきており、家庭による読み聞かせの研究はほとんどなかった。

家庭内の読み聞かせはどのような違いがあるかは、その国の教育観が反映されたものと考えられる。そこで日本の親の読み聞かせスタイルを欧米の親のものと比較することによって、どのような特徴を持っているか、どのように絵本の読み聞かせをし、またその背景にどのような育児態度の違いがあるのかを研究することが本研究の目的である。そのためアメリカ、フランス、イギリス、日本の五カ国の親にインタビューを行った。

Ⅱ　調査方法

調査期間：2024年６月～９月

調査対象：アメリカ、日本、フランス、イギリス、デンマークの親、各１名ずつであった。

本調査では、日本以外のインタビューの内容を日本語から英語に翻訳し、結果は英語から日本語に翻訳した。

インタビューによる調査であり、各協力者の自宅またはインターネットにおいて、半構造化面接を行った。

質問の項目は「絵本選び」と「絵本の読み聞かせ」であった。質問項目は、以下の項目であった。

１．絵本はどこから入手しているのについて
２．どんな絵本はいい絵本について
３．ご自身が買いたい本と子どもが欲しがる本と違う時はどうしているかについて
４．紙の絵本とデジタル絵本について
５．子どもと一緒に絵本を読む時間がないことに心配しているか。
６．自分がうまく子どもと一緒に読み聞かせできるかは心配かどうかについて
７．自分がうまく子どもと一緒に読み聞かせできるかは心配かどうかについて
８．絵本読み聞かせのときは一冊の本を読み終えるかについて
９．絵本を読む途中、子どもからの質問に答えるかについて

Ⅲ　結果および考察

1.「絵本選び」について

表１　　絵本はどこから入手しているのについて

国別	
アメリカ	現地の図書館、親戚や友達からもらった、自分自身小さい頃読んでいた本。
フランス	大体買っている、たまに借りる。言語、子どもの好み。
イギリス	子どもの年齢、興味、ファミリーアクティビティー、人種。
デンマーク	本屋さんで子ども自分で選んで買う、買うのは最小限にしてよく図書館で借りている。
日本	月２、３回10冊程度図書館で借りる。選ぶ時親は文章量、その時の興味に合わせて、福音館の年間購読、インスタなど。

アメリカやヨーロッパの親は子どもに絵本を選ぶ際、子どもの年齢、好みのほか、人種、言語、ジェンダーなども視野に入れていることがわかった。アメリカは移民の歴史背景があり、以前から多民族多文化の子どもたちがアメリカで過ごしやすいように、幼稚園の人形もいろんな肌色を置いてあり、細かいところまで異文化の配慮をしている。さらに近年同性結婚などの事例も絵本により取り上げ「ふたりママの家で」（パトリシア・ポラッコ、中川亜紀子訳、サウザンブックス社、2018）という同性結婚のパートナーと養子間の話の絵本も生まれてきた。

ヨーロッパでは多様性、異文化の交流が昔から重視されており、特に子どもに与える絵本からは様々な家族スタイル、ジェンダーなどが表している。本をとても大事にしているヨーロッパ文化にはこのことは子どもの育児文化まで綴じ込んでいることがわかった。さらに、日本はこれまで単一民族で発展され、またこれらの考えは絵本に反映されていないことがわかった。

表２　　どんな絵本はいい絵本について

国別	
アメリカ	たくさん読んで欲しいから、内容よりは楽しめる絵本
フランス	いいストーリがある絵本
イギリス	対象の読者によって違う
デンマーク	いい道徳感がある物語、そして何らか教えてくれる本
日本	絵が見やすくて色の使い方が鮮やかであるとか、ハッピーエンドで終わる内容だとか色々だが親の好みを押し付けないよう、色々な内容やデザインの絵本を読むようにしている。いろんな物語に触ってほしい。

アメリカ、ヨーロッパの親に聞くと、絵本を選ぶ際に、音のイントネーション、子どもでも簡単に繰り返し読めるような本を選ぶ傾向がある、絵本を通して早期教育の一環との認識が普遍的であり、絵がいい刺激になり文字を知るようになるきっかけと言えるでしょう。一方日本の親は個人の考え方を子どもに押し込みすぎず様々なスタイルの絵本を読み聞かせをしていることがわかった。この考えもあるから日本の絵本はロングセラーの他にも「11匹の猫」（馬場のぼる、福音書店、1967）などのようなノンセンスものもたくさん出版され、絵には多様な画風があり、内容も多様である。

表３　ご自身が買いたい本と子どもが欲しがる本と違う時はどうしているかについて

国別	
アメリカ	子どもたち自身が読みたい本を選ぶことが大事だと考えている
フランス	子どもたち自身に好きな絵本を選ばせている。
イギリス	子どもが欲しがる本と親が持たせたい本の両方を購入する。 予算がない場合、先に子どもが欲しがる本を買い、後日親が持たせたい本を買う。
デンマーク	子どもが選んだ本の内容による 賛成しないトピックの場合は買わせないが、歴史や道徳的価値がある本であれば選ばせる。
日本	子どもが欲しいのが本であれば自分が買いたい本と一緒に両方購入する。

上記のインタビュー内容から見ると本選びからは子どもの意志をどれくらい重視されているかがわかる。本選びの面では、アメリカ、ヨーロッパの親は自分たちの世界観を通して子どもに絵本を選んでいるが、一方的に押しつけではなく、子どもが買いたい本があれば、親は子どもの意思を尊重し、自分の意思で絵本を選ばせている。これは自分の考え、決定、独立性を大事にしている育児態度からのものだと考えられる。日本の親はなるべく多様な絵本を選んでいること、また子どもが買いたい本と自分が読んであげたい本を両方購入することからは育児は比較的に楽で自分の考えを押しつけずに育児をしていることがわかった。

表４　紙の絵本を買うか、デジタル絵本を使うか。両者は区別があると思うか。

国別	
アメリカ	紙の絵本を選ぶことが多い、子どもが実際に操作でき、本の仕組みを学べる（例：英語は左から右へ)、多くの親が子どもの脳の発達のためにタブレットの使用時間を減らすことがいいと考えている
フランス	クラスではスクリーンを使用するが、子どもにはスクリーンをあまり見せたくない。そのため紙の絵本を使用している。
イギリス	大きな違いがあると感じている。紙の絵本は五感を通じて探索でき、触れることや聞くことも含まれている。ページを捲ることがインタラクティブな体験を提供する。デジタルデバイスの過度な使用が、子どもや大人の知的発達を妨げていると考えている。
デンマーク	紙の絵本が好き。電子機器の使用時間を少なくしたいと考えている。
日本	紙の絵本が好き。紙の絵本しか読んだことがない。タブレットやスマートフォンは視力の観点からなるべく見せないようにしている。図書館から借りた本には、破損部分にテープが貼ってあったり、落書きがあったりするが、それが子どもにとって特別な学びとなる。多くの友達が読んできたことを感じ、次の読者のために丁寧に扱おうとする。

こちらの質問に対し、国別に関係なく親たちは紙の絵本を選ぶ傾向が強かった。原因として、物理的操作が可能、電子機械は脳の発達に悪い影響があるなどの認識が文化、言葉、国に関係なく共通となっていることがわかった。その一方、コロナ禍から日本の小学校はタブレットの導入や、ICT の推進、電子黒板の普及化からは、子どもたちはどの時代よりも電子メディアの溢れている環境に置かれている現状である。また、ゲームは低年齢化になっており、幼稚園児からゲームを遊んでいる子も多数いる。それであっても家庭では絵本のデジタル化は抵抗があることがわかる。このことからは日本は絵本の読み聞かせが気軽にできる環境であるから、電子ゲームとは違う認識をし、絵本は読み聞かせを通し親子で実際絵本のページを巡って、文字のルールを学びながら、コミュニケーションをすることを大切にしていることがわかった。

２．絵本の読み聞かせについて

表５　子どもと一緒に絵本を読む時間がないことに心配しているか。（仕事が忙しい、家事）

国別	
アメリカ	寝る前に絵本の読み聞かせをするのが定番になっており、絶対に飛ばすことはない
フランス	毎晩できるだけ子どもたちと一緒に読むようにしている。
イギリス	心配していない。 毎晩娘と一緒に本を読み、日中や朝も時間を作って一緒に読む。 保育園やパパ、祖母とも読んでいる。
デンマーク	子どもと本を読む時間が十分にある。
日本	絵本を読む時間は大切にしており、時間がないことに心配している。 物理的には時間があるが、時々読むのが億劫になることもある。 生後６ヶ月頃から毎日数冊読む習慣があり、特に寝る前に読んでいるため、ルーティンとして欠かさず読むようにしている。

寝る前のしつけとして絵本の読み聞かせは国別関係なく共通である。一方自分自身の育児、読み聞かせについて日本の親は欧米の親と比べ心配している点から、絵本の読み聞かせを実際には毎日何冊も読んでいるが、それでも自分自身の読み聞かせの時間がないことを心配していることがわかる。日本の育児悩みに関する調査（株式会社インテージリサーチ、令和３年）では専業主婦はフルタイムで働く女性よりも育児不安の割合が多いことから、この読み聞かせに関する不安も専業主婦の育児不安が抱えやすい傾向だと言える。内閣府が公表した「令和２年度少子化社会に関する国際意識調査（2021）」によると日本は「子供を生み育てやすいと思う」割合は、日本は（38.3）フランス（82.0）、ドイツ（77.0）、スウェーデン（97.1）に比べ低く、また「令和２年度家庭教育の総合的推進に関する調査研究」では、子育ての悩みや不安を感じる人の特徴として、平日こどもと触れ合う時間は４時間以上、精神的な負担を感じやすいこと、また、片方だけが働く家庭では、平日の子育ての分担をほとんど自分で対応している割合が高く、子育てについての悩みや不安を感じる割合も高いことが示された。日本の親は、特に母親が子どもと触れ合う時間が長く、絵本の読み聞かせを子育ての一環として、しないといけない内容だと考えているためだろうといえる。そのため物理的に時間があっても精神的な疲れなどできちんと読めていない不安を抱えやすい傾向がある。

表６　自分がうまく子どもと一緒に読み聞かせできるかは心配かどうかについて

国別	
アメリカ	NO!
フランス	日本語で読めない時は、物語を変えたり、子どもが既に知っている物語であれば子どもに読んでもらったりする。
イギリス	発音に苦労する単語があったとしても、音読することで子どもが聞いて、子どもが聞いて、その後で自分の音声発達のためにも役立つと思う。
デンマーク	No
日本	心配していない。保育者のような抑揚をつけて絵本を読む時間が大切だと考えている。 絵本の中でわからない言葉が出てきたら、一緒に調べようにしている。

この質問は親が読み聞かせの効果を過期待しているかどうか、またどのようなことを望んでいるかを知るための質問である。国別関係なく親は心配していないことがわかった。英語では音声発達のために読んであげたり、音読に力を入れたりしている。また、言語に関係なく抑揚をつけて読む時間を大切にしていることがわかった。子どもの言語はほとんど家庭から習得されたものでありこのように絵本の読み聞かせは言語発達の手助けとして利用されていることが考えられる。

表７　絵本の読み聞かせは集中して読む必要はあると思いますか。（子どもが遊びながら聞く場合は心配しますか。）

国別	
アメリカ	絵本を読む時は遊んではいけないが、おやつや飲み物は ok
フランス	物語は面白ければ、子どもは集中して聞いてくれると思う。
イギリス	読んでいる間は集中すべきだが、遊びたい時は一緒に遊んでからまた読書に戻る。
デンマーク	集中して読書するべき。そうしないと上手に読めるようにならない。
日本	集中してくれると嬉しいが、遊んでいたら自由にされる。本を日常的に触れさせること、また親が読書していれば自然に読書が身近なものになると信じている。

アメリカ、ヨーロッパの親たちは絵本に集中していることを望んでいることがわかった。また水分取るのはいいとし、おやつを食べながらはダメなどのルールも家庭にある。これは欧米の親にとって絵本はおもちゃよりも本の入門であり、学習面につながりがあるから集中して聞くことを要求していると考えられる。ただし、強要するのではなく、子どもの注意を引き、しばらく遊んでから戻ることなどに工夫をして、子どもに集中してもらうようにしていることがわかった。日本の親は集中して聞いてくることは嬉しいが、聞かないであればまた別の時間にするなど比較的に子どもの意思を尊重し、自然な環境で読み聞かせをしていることがわかった。

表８　絵本読み聞かせのときは一冊の本を読み終えますか。それとも何日間にかけて読んでいますか。

国別	
アメリカ	何日間も同じ一冊の本を読むことがある、通常一冊読み終わることが多い、短いから。
フランス	絵本による
イギリス	いいえ。いつも最後まで読むわけではないが、もし終わってなければ、後で読み終わる
デンマーク	長さによる。同じ日に終わることはいいと思っている。
日本	絵本を読んでいる途中で子どもが稀に「もうおしまい」ということがある。その時は理由を聞き、子どもの気持ちを尊重して途中で読むのをやめることがある。

日本の親は一冊の絵本でも途中で終わることがあるが、欧米の親はほとんど一冊その日に読み終えることが多いことがわかった。つまり、欧米の親は数日同じ本を読み返すことはあるが、一冊の絵本を途中で終わることはほとんどなく、その場ですぐにできなくても、必ず同じ日に終わることにしている。このことからは欧米の親にとって、絵本は学習の一環としてのものであり、始まりから終わりまで一冊を読み終えることを学習姿勢として大切に育てていることと考えられる。また一冊の本を繰り返して読む場合は、文字や音声を習得するため、好きな本を選んでずっと同じ本を読み替えることが目的だと考えられる。

表９　絵本を読む途中、子どもがたくさん質問をしてくる、そのときはどうしていますか。

国別	
アメリカ	時々は答えるが、時々は集中して聞くようにしている。
フランス	質問に答える。
イギリス	質問に答える。
デンマーク	単語の意味など、物語に関連した質問に答える。
日本	絵本を読んでいる時間は学びの時間なので、質問をしてきたら都度答えるようにしています。それでもわからないことは「後で調べようね」と言ってまずは読み終えます。

質問に対する態度はフランス、イギリスはいつも質問に答えるに対し、デンマークの親はほんと関連するなら答える、アメリカの親は時々だけ答えてほとんどは集中して聞いてもらうようにしている。日本の親はそれが学びの時間として考え、その都度答えていることがわかった。こちらの質問について、さらにどのような発問するか、親はどのように答えているか、こちらから質問するかどうかなどについて詳しく調べる必要があると考えられる。

Ⅳ　総合考察

本研究はアメリカ、フランス、イギリス、デンマーク、日本の五カ国の親に絵本選びと読み聞かせについてインタビューをした。その結果、日本と異なり、欧米の親は絵本を選ぶ際に、年齢以外もジェンダーなどの幅広い視野を考慮に入れていることがわかった。それは日本がこれまでほぼ単一民族で発展していき、一つの文化で育った子どもたちは今まで民族や言語などに配慮する必要はなかったためと考えられる。しかし、今時代は昔と環境が大きく変化し、幼稚園から海外のルートを持っている国際家庭も増えつつ、街で歩いていても他の言語に触れるチャンスは多くなってきた。今までは留学というルートを通じて日本の文化をある程度理解し、日本で学ぶ人が多かった。しかし、近年では、日本語を全く話せないまま移民として日本に来る家族が増えている。この事情からは今後人種、異文化理解を子どもの時代から育むために絵本の選択時にこれらのことを考慮することも望ましいと考えられる。

絵本の読み聞かせの時、集中して聞くことについて日本の親よりも欧米の親の方が集中して聞くことを要求し、一冊の本をその日のうちに読み終えることに力入れていることがわかった。欧米の親にとっては、絵本は子どもが文字を学習する前の前段階として、文字の仕組み（英文は左から右へ）、言葉の音声の聞き取りにも役に立つことなどに重視しており、それに対し、日本の親は集中することを強要せずに、絵本を通して親子の時間を大切にしている傾向が見られた。「ハーバードで学んだ最高の読み聞かせ」（加藤、2020）には、アメリカと日本の親の読み聞かせの違いを検討し、語彙の獲得の期待について日本は46.15%に対し、アメリカは88.3% であった。また読み書き能力の発達の項目でも日本は19.23% に対し、アメリカの親は72.43% であった。（p29）このデータからは日本の親は豊かな感性を育成したいと考えている一方で、アメリカの親は言葉を教えることを目的としていることが示された。しかし、ヨーロッパの読み聞かせについてこれまでの研究は少ないものの、特に家庭内で行われた読み聞かせの研究はほとんどなかった。高（2023）では日本と中国の親の読み聞かせを研究し、指差しのところでも日本の養育者の65％が「絵に指差し」を選んでいるに対し、中国の養育者は55％が「絵と文字の両方」とも指差しをしていることがわかった。今は「令和の日本型学校教育」（文部科学省中央教育審議会、2021）が提唱されており、子どもたちが自ら問いを立て、自ら解決方法を探る対話的学習が盛んに行われているが、根本的な改善はまだ見られていない現状にある。これから、一番対話が成立しやすい絵本の読み聞かせにも注目することが必要であると考えられる。欧米との読み聞かせの比較することによって、親による読み聞かせに反映された育児態度を明らかにし、今後子どもたちの会話、言葉の表現を育成するにはどう活かしていくのが課題であろう。今回の研究は本調査の予備調査とし、それぞれの国の親の一人を代表としてインタビューによる研究を行った。今後は読み聞かせの時の質問の仕方、対話の内容、また絵本読み聞かせの時の指差しなどについて質問紙調査による調査を行い、欧米と比較しながら、家庭内の読み聞かせの可能性を検討して行くことが必要だと考えられる。

（引用文献）

秋田喜代美・無藤隆（1996）．幼児への読み聞かせに対する母親の考えと読書環境に関する行動の検討．教育心理学，44, 109-120

厚生労働省ホームページ『保育所保育指針解説』平成30年２月
https://www.mhlw.go.jp/web/t_doc?dataId=00010450&dataType=0&pageNo=1　（2024年11月20日確認）

文部科学省ホームページ『幼稚園指導要領解説』平成30年２月
https://www.mext.go.jp/content/1384661_3_3.pdf　（2024年11月20日確認）

「日本の絵本の歩み―絵巻から現代の絵本まで」 国立国会図書館　平成29年11月1日発行

笹田義弘・山本真由美（2021）．絵本の読み聞かせに対する保育士の意識，徳島大学総合科学部　人間科学研究，29, 67-84

中川素子・吉田新一・石井光恵・佐藤博一（編）．（2011）『絵本の事典』，268-271．朝倉書店．

株式会社インテージリサーチ（令和３年２月）「令和2年度文部科学省委託調査「家庭教育の総合的推進に関する調査研究～家庭教育支援の充実に向けた保護者の意識に関する実態把握調査～」報告書」
https://www.mext.go.jp/content/20210301-mex_chisui02-000098302_1.pdf　（2024年11月20日確認）
加藤典子（2020）「ハーバードで学んだ最高の読み聞かせ」　かんき出版
こども・子育ての現状と若者・子育て当事者の声・意識（令和5年１月19日）　内閣官房こども家庭庁設立準備室
https://www.cas.go.jp/jp/seisaku/kodomo_seisaku_yushiki/pdf/230328_betten5.pdf　（2024年11月20日確認）
高雪飛（2024）「養育態度の日中比較――家庭内における絵本の読み聞かせスタイルの違いを通して」西南学院大学人間科学研究科修士論文